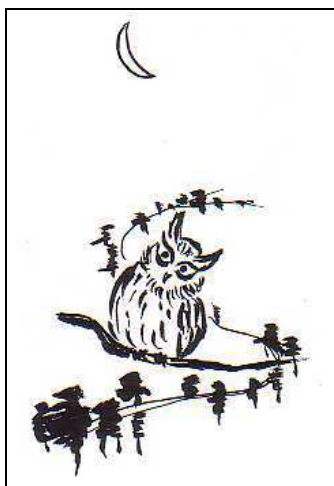

一部50円です



曲がりくねった道

めったに人とすれ違わない道なのだが、会えば誰だかすぐにわかるので黙って通り過ぎるわけにはいかない。挨拶だけならまだしも、「どこへ行ってきちゃったん？」と問われたり、たまにあった人なら「今、何しとってんやいな」と聞かれるから、なにがしかの答えをしなければならぬ。小さい村であるからおかしな振る舞いをすれば村中の笑いものになるからだ。

村の道はただ通行するためにあるのではない。道は村の社交場でもあるのだ。仕事に出かけるときも通学で通るときも誰かに出会えば挨拶をして互いの様子を確かめあうのである。百人足らずの集落であったから、互いへの関心は強くよく話題になったのである。村内と村外は村人にとって全く違った世界であって、もっぱらの関心事は村内のことであった。

学校を出て会社を辞めぶらぶらしている時に村人と交わす言葉に私は困ったものだ。「どこへいってんやいな？」と聞かれれば黙って笑うしかない。まじめに働く村人を見て育ったせいか、ぶらぶらしていることに言われぬ後ろめたさを感じていたのである。

歩く道を鉄道に変えたことがある。いくつもの陸橋が架かる線路を歩くのである。私は歩きながら、なんともやるせない沈んだ気持ちになっていた。村人に顔を会わせないように願う卑屈になった自分を嘆いていたのだ。村人が期待する答えを言えない境遇に悶々といら立っていたのだ。

今は道もよくなり車で行ききするために村人と話をする機会もなくなった。母も「たまに出会ってもどこの子やわからん。昔は歩いて通学していたから顔見知りになったが、車やからさっぱりわからん」とぼやいている。ほろ苦い青春時代の想いはあるが、村道で人々が出会ってよもやま話をすることによって村人が救われていたのである。山ばかりで退屈しがちな日々の生活の中で、道は人とふれあい楽しみをみいだす数少ない貴重な公共の場であった。道がなければ、人々は家に閉じこもり孤立する。顔見知りの人とたわいもない話を交わすことによって気分転嫁や情報交換をしていたのだ。今は、皮肉にも自動車ばかりが通るようになってしまい、村人が出会う機会が少なくなった。(嘉)

女人結果5

女性蔑視観は九世紀後半に登場し、十一世紀に貴族社会に定着したと結論づけ、いったん受容すると、日本はインドや中国よりはるかに露骨で、いびつなたちに変容したと平さんは指摘している。

たとえば中世の文献によく見られる「女人罪障偈」というものがあって、「一人の女の罪業の深さは、全男性の罪業の深さに匹敵する」とか、「女人は地獄の使者である。外面は菩薩だが、内心は夜叉だ」という。強烈な差別だが、ここまで来ると滑稽にも思える。しかも「華嚴経に云はく」「涅槃教に云はく」というかたちで実際にはそれらの經典に存在しない文言をまことしやかに語るのである。

このような女性蔑視が強まる中で、女人結果が登場する。

当初は戒律の観点から、一定の年齢以下の女性の立ち入りを制限したり、夜宿を禁止したりしていたが、十二世紀になると、すべての女性を排除するようになる。女性の存在自体が穢れているという女性不浄観の浸透である。

日本の中世では女性は抑圧され自由がないように思えるが、じっさいはどうだったのだろうか。その前に、なぜこのような女性不浄観が成立したのかという問題を考えてみよう。(猿)

おひなさん

出して飾って、またしまう。年をとるにつれてひな飾りがだんだんおつくうになる。

一对の内裏さんだけ飾った。仏間に入ると何となく淋しそう。話しかけてみる。

どっちが右だったかな。まあいいか。間違っていたらゴメンネ。

ひな飾りが昔は大変だった。母娘でワイワイ言いながら、ああ虫が喰っている。着物が、髪の毛がと、ひとつひとつ手にとって、最後まで賑やかな事。そんな過去を思い浮かべながら、白酒を味わってみる。流しびな、下賀茂神社に参り一生の災いを人形に身代わりさせるという意味合いから大勢の人の合間を縫って手を合わせておく。昨今は、可愛い親のおひなさんが人気。売れ筋は、3段飾りが20万〜30万、7段飾りが50万。

女の子が生まれると母方の親から贈られる。最近は少子化の影響が大部分変化をしているらしい。

東日本震災から、まもなく3年。家族が避難して暗い押入れにしまわれたままのひな人形は泣いている。家族揃って祝える日は、いつくるのかと、友からの便りをもらって「床の

間のおひなさんに、あんたは幸福やな」とウインクをしておく。

銀熊堂の華さん

第64回ベルリン国際映画祭で、黒木華さんが最優秀賞（銀熊賞）を受賞された記事を読む。日本人の受賞は四人目と知り、すごい賞なのだと感動した。

出演された映画「小さいうち」友達三人でみる。昭和初期、東京郊外の家で起きた恋愛騒動の秘密が、お手伝いさんの目を通して明かされる話。

控え目な、そして純愛な23歳の若い黒木華さんに、これからも女優として素晴らしい役を演じて頂きたいと期待している一人である。

藤圭子さん

自分の曲では、「女のブルースが好き」という想いを帯びたハスキーな声と後半の高音。大ヒットを連発した愛娘もまた母親ゆずりの宝物として名曲嵐の名神でお母さんに会いたいよ今ならいえるよ

母娘の歌をしみじみと聴きなおしたい。ヒカルさん、幸福になってネ、その姿を亡きお母さんに見せてあげてよ。

その時が来た

「食べ物をもう少しあたたかくして食べさせてくれ」「手が冷たい、湯でぬくめてから、おむつ替えてくれ」

「ずっと側にいて世話をしてくれ」

「おしっこなんか出ていない」

「あんたの世話になりたくない。娘をよんでくれ」

書き出せば限がない。

私も四人の病人を家で見送ったが、若かったせいか、さほど気にならなかったけど。

今思えば、あれだけの雑言をまともに受けながらよく出来たものだと思う。100点を頂きたい。

いよいよ本番、私にもその時が来る。素直に何事も受入れられるかな。

特別養護老人ホーム、施設介護の向上を目指してという記事が目に入るたびに、他人事ではない。介護を受け入れる自分の姿を想像し、受けたいケアについて首をひねる。

俳句

土田 裕

掃き惜しむほどのくれなゐ落椿
轉りの競ふ夜明けとなりにつけり
沈丁や待つことなくて逝きし人
藤の花ありかなしかの風に揺れ
坂の上坂の下にも花の雲

「芥川だより」懇親会の報告

さる3月8日、芥川商店街の事務所にて開催しました。

10名の参加者があり盛況でした。

ゼンマイ、フキノトウなどの山菜珍味を肴に、富田の銘酒やワインを頂きながらの楽しい会話、高級料亭とまちがうような宴会になりました。

川崎から来られた土田さんの即興の句会も大変たのしく皆さんの笑いが印象的でした。その時に読まれた句を書き留めました。

俳句

集まれば別れる定め春の宴（土田）

若き日を煮しめに込める春の宴（大田）

集まれば又集まれたし秋の宴（明石）

もんもんとなすをゆめみて春すぎる（下村・大田）

（下村・大田）

もんもんとなすをゆめみて春憂ひ

（下村・土田）

歳とれど春を着こんでひそやかに

（大田）

春山に山頂遠し齢すぎる（明石）

春泥に回り道する齢かな（大田）

まわりみちころんですべつつくし摘

む（下村・大田）



《闘病記》 13

空想の世界

梵店主

急性だと一ヶ月、慢性だと10年もつかな」

と聴診器をポケットにしまいながら担当医は言った。

「ちよつと聴診器貸して」

「ああ、いいですよ」

初めて手にする聴診器をよっちゃんは胸に当てて聞く。サーサーと風が吹いているような音に混じって「ケン、ケン」という音がする。医師は

「それが間質性肺炎の音です。この病気も難病で治療方法がありません」と言った。

よっちゃんは、これまで漠然と死ぬことを考えていたが、目前に「死への恐怖」が立ち塞がってきたのだ。

親しい尼さんは、閻魔の裁きが待っていると、いつもよっちゃんに言っていた。

死ぬと閻魔様の前に連れて行かれ、生存中のおこないの罪状を裁くらしい。聖書にも最後の晩餐がある。これから病状はどうなるのだろうか、退院することなく死んでいくのか、次から次へと心配事が

思い浮かぶ。

まさに八方ふさがりでなんともならない

い状況を何とか解決しようと、よっちゃん

は考えはじめた。

入院すると、様々な。不安が浮かんでくる。店はどうなるのか、友人たちとも会えない。自分の居場所が消えてゆき、社会参加も難しくなる。金も稼げなくなし、行きたいところへもいけなくなる。高齢の母、家内や子供たちも困るだろう、路頭に迷うかもしれない。

しかし、これらのことは死の恐怖ではない。自分で想像した事ばかりだ。死の恐怖、それ自体はさほど大きな心配事ではないのではないかと考えた。関連して起きるであろうと予想した心配事をひとつひとつ考えていけば死の恐怖そのものではない事ばかりだ。

死の恐怖の中身とはなんなのか。いくら考えても浮かんでこない。そうだ、ないのかもしれない、と単純に考えたのである。これまでいろいろと見聞きしてきた死の恐怖は、映画や雑誌で見た作り話をいつの間にか本当の出来事だと錯覚していたからではないだろうか。

病にかかり死ぬことにでもなると本人も家族も悲嘆にくれるが、死の恐怖とは別物だ。無責任と言われようが、死に関連していると思える事柄をはぎ取っていくと死の恐怖自体はほとんど無くなってしま

う。

仰心を持たない人間は、地獄の底に突き落とされるらしいが、本当だろうか。

宗教とは時の為政者による圧政で苦し

む弱い人々を救済するために革命の旗を掲げ、社会変革を唱えていたではないか。それが時とともに、権力者に取り込まれ、目に見える現実から見えない心の世界へ変遷させられてしまったのだ。

ももとの宗教はもつと分かりやすか

ったにちがいない。人が少しでも楽しく暮らせるように考え出されたものであつたはずだ。それがいつのまにか、難解な經典となり意味不可解なものになってしまった。たぶん時の権力者との折り合いで宗教が生き延びるために、日々の生活をよくする具体的なことから見えない心の問題へと後退を余儀なくされたからであらう。逆に権力者が人々に圧政を強いる施策として宗教が利用されてきたように思える。

こころの世界は、見えないから一般の人にはわかりにくい。なんのことやら分からないのである。我々は、あの世のことよりも、今の生活が大事である。今の生活が苦しくとも耐えて神仏を信心さえすれば、きつと、あの世では極楽へいけると説かれても実のところ腑に落ちない。

ほんとうの真実はちがったところにあったのではないか。我々が恐れる感じるものはつくられたまやかしのもの

ではないか。もともと死の恐怖などは誰もさほど気にしていなかったに違いない。

それよりも日々の暮らしが問題であつたであらう。そんな人々の願いを煙に巻くためにつくられたものが死の恐怖心ではないだろうか。あの世の話などは全くの作り話であるとしか考えられない。

人が死ぬことは当たり前で自然なことであつて、そのこと自体に恐怖や耐えがたい苦痛などはないのだ。自分のかつてな欲で死にともなう関連した事柄に目をとられているだけなのだ。ああもしたい、こうもしたいと思う欲をなくせば何もこわいものなどないのである、とよっちゃんは考えることにした。

言葉が人の考えを縛り付ける怖さを意識しないと恐ろしいことになる、と一人合点したら、これまでモヤモヤしていた気持ちが晴れて、さほど心配したことはないのかもしれないと思えてきた。

死の恐怖という言葉で踊らされてきたに過ぎないのだと考えることにした。人は生まれながらに言葉を知っていたわけではない。つくられた言葉を教え込まれた結果、言葉によって振り回されて生きてきたのだ。人類が発明したもので一番と思えるのは言葉だが、言葉の功罪

もあるのだと気付いた。

連載◇おつちよこチヨイぼけ13

ダイエットしながら福島…の巻

しつこくおダイエットを続けている。ほつぺたに丸っこい肉がついているアンパンマン顔のせいかな、「痩せたね」と言ってくれる人は少ないものの、とうとう八キロ減った。

最高体重を基準に言わせてもらえば、一〇キロ減。すごくないですか？（ここは若者風イントネーションで）にもかかわらず、である。ふだん顔を合わせている連中は誰も「痩せた！」と言うてくれない。

この間、仕事で福島に行き、五年ぶりに会った人が「ちよつと痩せました？」と聞いてくれた。いい人である。

福島…。私が行ったのは郡山で、福島第一原発から五七キロ離れている。JR郡山の駅前に、太陽光発電の放射線量計測装置があった。

地元のEさんが「こういう計測器があつちこつちにあります。学校や保育園、公園のグラウンドとか」と教えてくれた。Eさんは私に「痩せた？」と聞いてくれた、いい人である。高校生と小学生の二人の子供をもつパパさんでもあるので、放射線量は気になるはずだが、「僕らは見慣れてしまつて、ああ、今日はこれぐらいかという感じで

すね」とたんとと言い、私にやさしく、「大丈夫ですよ、今日はそんなに高くないですしね。今日の数値では、自然界にある放射線量の四倍ぐらい。体に悪い影響は出ないです」と気遣ってくれた。

Eさんの仕事は化粧品会社の営業課長。市役所の人でもなければ、放射能の専門家でもないが、放射線量のことスルスルと口をついて出てくる。福島の人にはもはや日常、当たり前のことなのだ。「当たり前になってはいけないですけれどね…」とEさん。

三年前のあの日、Eさんは商談のため、いわきの化粧品店にいた。海から五〇〇メートルの距離で、消防団に促されて近くの高校に避難していたそうだ。会社に帰りついたのは夜の九時半。会社はモノが倒れ、あらゆるものが散乱していたらしいが、そんなことは「片付けたらいいだけのことでからね」。問題は、その後に起きた福島第一原発の水素爆発。会社は社員に自宅待機を命じた。

「一五日から会社に出てくるなということになって、僕は家族を車に乗せ、家内の実家のある栃木に向かいました」。放射線から子供たちを守る。父親として必死だったに違いない。「道路はいたるところが寸断されて渋滞がひど

くて、なかなか前に進まないんです。ガソリンが手に入らない状況でしたから、車の暖房を消していたので、とにかく寒かったですね」。

Eさんは子供たちだけ実家に預け、すぐに福島に戻った。早朝から何時間も並んでガソリンを買い、やはり寒さに震えながら。「家内も置いてきたかったんですが、どうしても僕と一緒に福島に帰るというもんで（笑）」夫婦愛である。ごちそうさんである。

Eさんは終始、穏やかな口調で話してくれるのだが、その内容は結構、怖い。

「僕ら、海辺の方に仕事で行くときは、サーベिकाウンター、簡易型の空間放射線量計測器いわゆるガイガーカウンターなんですけど、これを持って行つてました。立ち入り禁止地区に近付くとガイガーガーガー鳴るんですよ」。

その状況、いまもあまり変わっていないのではないかな。

「僕が腹が立ったのは、福島に対する偏見です。コンビニに行くと、福島ナンバーの車の人は店内に入らないでくれ、必要なモノをメモしてくれたら、こちらから持つて行くからつて。そんな対応はないですよ」

そんな対応をしていたのか！ 一体、どのコンビニチェーンだ。二度と買わん、と腹が立ったが、私ごときに不買運

動をされても痛くも痒くもないんだろうな。 温厚なEさんが寂しげに怒っていたことは、「福島では震災は終わっていないです。だのに、東京でオリンピックを開催するつて、みんな結構、盛り上がっているじゃないですか。安倍さん、何を考えているのかなと思いますね」。

ほら、見ろ！ 「芥川便り」に書かせてもらったが、東京オリンピックなんかしとる場合じゃないんだつて。いつの日か、東北でやる。「復興ありがとうオリンピック」でなきや、税金一円も使うな！と思つていたが、やつぱり、ワタシが正しかった。安倍さんなんかに任せておけないが、民主も維新も「みんな」ももつと頼りないし。まったく、政治家人材不足の国である。

消費税上げて、年金支給額減らして、年金支払い額増やして、何が「アベノミクス」だ。国民、なめんな。福島悲しみをちよつとでも感じろ。「安全」と言うなら、原発は東京で稼働させろ。皇居前につくれないもの、世界中のどこにもつくるなというんじや。

で、私のダイエットだが、福島から戻り、たまたま一カ月ぶりに会つた友だちが「痩せたねえ！」と言つた後、顔を曇らせ、「ガン、ちゃうよね？。検診、受けや」つて。ガン。(AO)

認知療法と禅

伊藤 明(精神科医)

「認知療法と禅」。この話題について書こうとして、二十年前に同じテーマで書いた文章があることを思い出しました。それを読んでみると、うまく書けているように思いますので、ここに再掲をしようと思います。ただそれだけでは手抜きだと誹られそうなので、二十年後からの感想を加えたいと思います。文中に「二十年前」とあるのは、「四十年前」と読み替えていただくこととなります。では・・・

「禅の話」

診察室で患者さんと話していると「心配なこと、イヤなことを忘れる方法はないものでしょうか」とよくたずねられます。ここでこの問題についてお話ししようと思います。

もう二十年以上も前ですが、高校生時代に私は教師に連れられ、一夜曹洞宗の禅寺で座禅したことがあります。その時の住職のお話しは座禅の心得についてのものでしたが、非常に印象深いものでした。

住職の話はこういうものです。座禅をしているときさまざまな想い(雑念)が次から次へと湧いてくる。これはちやうど、コップに汲んだ濁り水の底か

らアワが湧き上がってくるようなものだ。湧き上がってくる雑念にとらわれずそのまま放っておく、次から次へと湧いてくるが、すべて放っておくこととする。するとまるで濁り水の泥がコップの底に沈み、上の水が澄んでくるようにこころの中が澄んでくる、というものです。

私はみなさんに座禅の修行をすすめているわけはありません(それもいいかも知れませんが)。ただこの話はたいへん含蓄が深いように思いますので、これをめぐって考えてみます。

◆「思いつく」ということ

人が「何か」について考え始めるときのことを想像してみましょう。それはまず「思いつく」ことからはじまります。たとえば、道を歩いているとき、

仕事の手を休めてボンヤリと窓の外を眺めているときなど、突然パッと何かが思い浮かぶ。それは何か素晴らしいアイデアかもしれないし、昔の恥ずかしいイヤな思い出であるかもしれない。こういうことは私たちの日常生活の中でしばしばあります。

この「思いつく」ということは突然のことであり、内容の予想が全くつかないというのが特徴です。

これは先ほどのコップに汲んだ水の

予想される心配ごと。人は必ずこういったものをいくつかもっているものです。しかし物事には考えるべきタイミングというものがあり、適当でないときに考えても何の結論も出せず、気持ちだけが暗く沈んでしまうことがあります。過去のイヤなことを考えるのは後悔につながりますし、逆にあまり遠い将来について何か結論を引き出そうとしてもそれは無理な話です。こんな場合、追求しないで放っておく、何か結論を出そうとせず放っておくことが正解であるように思います。

コップの底からアワは次々と湧き出してきた、水面でパチンとはじける。はじけたときが何かを思いついた時で、本人の意思に関係なく不意に次々とはじける。その内容ははじけるまで予想がつかないわけですが、おおむね本人が気になること、心配なことである場合が多いものです。

こうなるとその話題についてあれこれ考えをめぐらし追求し始め、その結果不安で眠れなくなったり気分が滅入り落ち込んでしまうことになります。

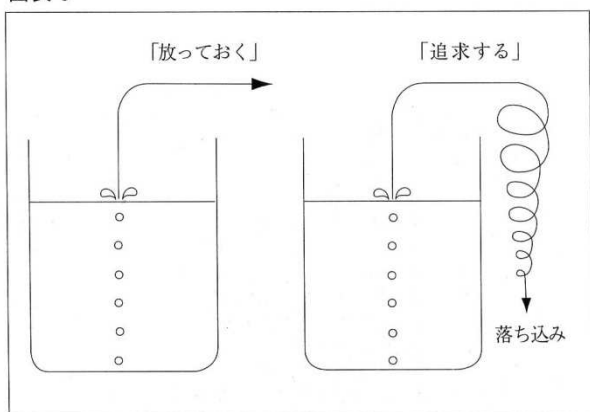
ここで心配ごとを「追求する」ことは、「思いつく」とことは全く別のプロセスだということに注意していただきたいと思います。

◆「追求せずに放っておく」

もうすんでしまった過去のイヤなこと、あるいは将来待ちうけていると

ここで注目していただきたいのは、イヤなこと、心配事を忘れようとするのではなく、あくまで結論をだそうとせず「放っておく」構えでいくという点です。そうすれば知らず知らずのうちに忘れていくことになるものです。「心配事を忘れよう」とするのは考えてみればひどく矛盾した話です。忘れようと思えること自体、それについて考えていることなのです。忘れるために何かに熱中する人もいますが、これもあまり良い方法とはいえません。気分転換の方法をもつという点では良いのですが、他のことに熱中しないと忘れられないのならば、熱中から醒めた時には、また思い出すということになりかねません。つまり水のアワのように偶然に思い浮かぶことについては意志によってコントロールできないけれど、思いついたテーマについて、それを追求して考えるべきか

図表 9



どうかは自分の意志によってコントロールが可能で、考えるに値しないことは追求しないで放っておく。するとだんだん忘れて行くということです。

ただ、「追求しないで放っておく」ということはすぐにできるようになるものではなく、いくらかの練習が必要です。これは簡単なことではありません（何しろ話題は気にかかることが多いのですから）が、それほど難しいというものではありません。とくに「放っておく」ということがうまくできて悩まずにすんだ経験を一回でも味わうと、その後は比較的容易にできるようになるものです。

患者さんにこのような説明をして「放っておく」練習をしてもらった例では、一カ月程度でかなりの効果がでてくる場合もよくあります。また私の身近のドクターに話を聞いてみると、ほとんどの方が似たような経験をもっておられます。職業柄ドクターはこのような技術を身につけていないと、次々とやってくるストレスを乗り越えていけないことだと思えます。私たち凡人には禅の悟りの境地は想像もつきませんが、ストレスの多い私たちの日々の生活に、座禅の知識を応用していくのは非常に有益だということがわかります。

◆楽観主義でゆく

私はかねがね、物事には考えるべき適当なタイミングがある、と考えています。将来のことで心配事があっても、現在の時点で何もすることがなければそのまま放っておく。結論を出さずに放っておくことにするのです。時間が経って、対処しなければならなくなったら改めて考えるということです。

いま何か対策をとることができたら、できる範囲ですることは必要でしょうが、その対策にも限度はあり、そのことで心配が解消するということはないものです。心配事を際限なく考えていると気が滅入って来ってしまうことになるものです。このようにならないためには、ある種の楽観主義でいくということが大事です。つまり今の時点でできることをしてしまつて、それ以上何もすべきことがみあたらないというときには、放っておいてその件については追求しないことにする。心配なことは何回も思いうかんでくるかも知れませんが、そのたびに放っておくことにする（これは上に述べたことに同じ）。そうすると、いつのまにか忘れることになるのです。こうしていざその時点になると、案外、気に病んでいた事は解決してしまっているケースは多いものです。私自身の経験から言うと、半分以上の心配事が、その時点に

なつてみると、消えてしまっています。この意味で楽観主義になることが大切だとおもいます。

将来の事は、論理的に言っても結論は出せないもののに、それに結論をつけたがるのが人の本性のようです。しかしまだ起こっていない将来に属することについて、その可能性を考えるのならともかく、結論を云々するのは、どだい無理があります。よい結論を無理に出そうとする姿勢は、その反対の、失敗に対する不安によって裏切られることになります。逆に、悪い結論を予想すると、気分が暗くなりかえつてそれだけ成功への執着が強くなつてしまい、こころを動揺させられます。

いずれにしても将来に属することに結論をつけようとするのは、誤った判断ひきおこすことになります。将来のこととがらに対しては、結論を保留して、棚上げしておくというのが、正しい考え方だということになります。

◆以上が二十年前の私の文章です。この内容について、いま修正の必要性をあまり感じません。これ以来、私はこのような観点を取り入れて診療をしてきました。この二十年間の経験によれば、これはかなりの治療成績が上がっているのではないかと思っています。

「追求しないで放っておく」ことを患者さんに練習してもらふことで、即効

性は望めないものの、一ヶ月二ヶ月と経過すること、徐々に「放っておく」ことができるようになり、その人の言葉が明るく変わってくるのをしばしば感じます。患者さんには少しの努力をしてもらうことになりませんが、これは自分が楽になるためです。ので、十分な報酬が見込めるわけです。多少のストレスにさらされても、落ち込むことがすくなくなり、ストレスに対する抵抗力がついてきているといえるのです。また疲れがたまっているようなときには、人は往々にして気持ちが悪くなり心配事を際限なく考えてしまうものです。こんなときに、この方法を活用してもらうのも有効です。

このようにして「禅」から学んだことは、実は認知療法の窮極的な形なのではないか、と私は考えるようになっていきます。



素老人☆よもだ帳（1）

坂本一光

○『よもだ』とは何か一よもだ帳開帳の弁
先ずは、題名にある『よもだ』という言葉を説明しなければならない。広辞苑にも載っていない言葉である。

『よもだ』は、私の故郷伊予地方、愛媛県松山市周辺で使われる方言である。

小さいときから大人が使っているのをよく耳にした言葉だ。私が理解したところでは「ふざけた、冗談の、馬鹿げた、まじめでない、お調子ものの」といった意味をもつ。あるときは相手の話を面白がって「またよもだぎり（ばかり）言うて」とか、またあるときは相手を軽くいなすように「いつまでもよもだぎり言るんで（言ってるの）」などと使う。こうした例は、相手を否定しない、むしろ愛着を感じている場合である。一方、語気を強め「あのよもだが！」とか「あんなよもだもん！」と言われたら、これはもうおしまいである。愛すべき存在から全否定まで、『よもだ』という言葉は広く使える。しかし、普通、「よもだよのう」と言われる人は、肩ひじ張らず、形式ばらず、一面的でなく、強い者や権力に媚びず、ユーモアを解する愛嬌ある人、決して憎めない人である。私は、口にもでき

なかったが、どこかで『よもだ』であることとにそこがれていた気がする。

10年ほど前、何かの拍子に『よもだ』という言葉思い出して調べたことがある。田舎を出て京都、大阪、松江と渡り歩いていて間に、いわば自分が失くしたことに気づいた言葉であった。しかし、辞書にも無くて結局日本語としての説明はわからなかった。そのとき、『よもだ』という言葉は、一方向でないという意味で『四方（よも）』から来ているのではないかとひそかに思ったりした。しかし、よもや『よも』（まさかの意）からではあるまいな、と思った瞬間、「いや、これだ！」と直感した。そうか、『よもだを言う』とは、おもしろおかしく、嘘もまことと、まことしやかに「まさか話」をすることを言うのだ、と。しかしまた、よもだ話の話題は次から次へと尽きることがない。それを思うと、『四方（よも）』説もお捨てがたい。『よもだ』とは何か、その由来いまだ結論出ずじまいの言葉を題名に使った。

それにしても小さいときから親しんだ方言はまさに母語であり、その意味する全体をいわゆる標準語に置き換えるのは不可能である。「何よもだぎり言るんで」は、「何を冗談ばかり言って」と同じではない。私が通った松山市にある高校の地区同窓会の名に『よもだ会』がある。よもだ話を言い合う会であるが、『冗談会』や『四方山話会』では行く気にもならない

だろう。

ここで、まじめなよもだ話を一つ。言葉は面白いという点で『よもだ』に通じる。私は1984年4月から2010年3月までの26年間、松江に単身赴任をしていた。家族を大阪に置いてというよりは、「あんた行きよ」「お父さん行つといで」の単身赴任である。そこの話。ある大学教授が環境問題について地域に

ある。また、いかなるさま、いかよう（如何様）という意の古語に由来して、いかにもそうだと思わせるようなまやかしもの、インチキ、不正、という意味も載っている。今では後者の意味でしか使われないが、古い文化が残る出雲地方には古風な物言いが今でも残っていたのである。「カルチャー・ショックだ」、とあの教授は笑った。

さて、みなさん、誰かと議論するときに相手の話を聞きながら、言いがかりで一度この「いかさま、いかさま」を使ってみたらどうでしょう。まちがっても首を横に振りながら言うてはだめです。よもだですめばいいのですが。

というわけで（どういうわけかよくわかりませんね）、『芥川だより』No.88に『ありふれた奇跡、水の話をしよ』を連載寄稿した大分の素老人が引きと、一番前に座った老人が、「いかさま、いかさま」と首を縦に振りながらうなずいている。「いかさま」と口にしながらか、妙に納得している様子である。「いかさまですか」と問うと、「はい、いかさま、いかさま」。どういふことだ、と思いがから帰ってきて、あとでわかった。いかさま（如何様）とは、すでに古風な言い回しであるが、いかにも、なるほどの意で、「いかさまもつともな話だ」という風に使うと辞書に

尊敬してきた作家です。よもだにあこがれてきた私も、よもだ話はまじめにすることを忘れず、水の話に関連して書き残したことや、我が人生であれこれ思い出すこと、言い残すこと（まだ少し早いでしょうが）などを不定期連載でご免で書いてみます。ご笑読をよろしくお願いします。

（かたちは心であり、心はかたちになる）
■大分の素老人）



春……花よ蝶よの季節

大江雉兎

寒さが去って春めいてくると、テレビからは桜情報がしきりに流れてくる。桜前線という言葉も奇異に聞こえるわけでもないところを見れば、私たち日本人の季節感覚には桜は不可欠な存在であるようだ。

しかし天邪鬼めいた物言いをするとすれば、日本人は本当に昔から桜に愛着を抱いていたのだろうかという問いかけがないわけではない。西行法師には桜を題材にした詠歌も多いし、江戸時代には現代にも通じるお花見のドンチャン騒ぎも行われていたらしいから、それら

をもつて古い事例とすることはできない。

しかし、もつと時計の針を巻き戻して奈良時代ぐらいになるとどうだろう。万葉集あたりを持ち出すと、桜よりも梅や桃の方が重視されていたのではないかという議論も出てくる。

中には、桜は国花だといった話を始めるムキもいるが、あいにくなことに桜を国の花とするのは長い歴史のある話ではない。君が代論議ほどデリケートなものではないにしても、いずれの場合も時間的な裏付けがあるわけではない。歴史的な事実を求めるのなら、日本人はいつ頃から桜に愛着をおぼえるようになったのかというのは、腰を据えて考える価値のあるテーマなのである。

とはいえ、面倒な議論から目をそらせば、満開の桜に春を実感するのは紛れもない事実である。それなら桜に対する民族意識にケチをつけるのは、ただの臆曲がりということだろう。だがそこまでを認めたとしても、なお引っかかりを覚えるのは、春といって桜ばかりをクローズアップする態度であり、お花見の場所取りに代表される桜名所でのバカ騒ぎである。あれなどは、民族的な性向というよりは、偏向的な集団心理だろう。みんなが行くから私

も行くといったような軽薄さしか感じられない。その一方、翻って考えてみれば、こういう見方もできる。その是非を尋ねるのはやめておき、サクラサクラと連呼しておけばとりあえずは丸く収まるのではないかと。複雑な社会を構成する一つひとつの事象に対して、世の中の一人ひとりが自己責任を伴う主体的な判断を下すのは、口で言うほど簡単なものではない。「花は桜木、人は武士」ではないが、どんなジャンルであっても代表的なものをひとつ、適当に設定しておいてもらえば、ゴチャゴチャ考える手間ヒマも省けてありがたい。春の季節に桜をもてはやし、世に言う桜名所に人々が吸い寄せられるのも、実際のところはそんなに深く考えないで「まあ、いいんじゃない」と流しておけば済む話なのかも知れない。

ところで春の風物詩といえば、もう一つ、花に集う蝶も取り上げてみよう。桜に対してでさえ天邪鬼な態度が出てくるのだから、蝶に対してもご託は並べられる。たとえば、よく知られた唱歌「蝶々」。蝶々が可愛らしいといったイメージは、この歌に代表されるといっても過言ではなさそうだが「♪蝶々、蝶々、菜の葉に生まれ」で始まる歌詞の源泉を探してみると興味深い俗謡に突き当たる。

江戸時代に出版された俗謡集「山家鳥虫歌」に収められている歌詞に、次のようなものがある。「蝶よ胡蝶よ、菜の葉にとまれ、とまりや名がたつ浮名たつ」。前半部分は有名な唱歌とほぼ重なるので、この俗謡をベースにかの唱歌の歌詞が作られたと思われるのだが、問題は花から花へ移ろい飛ぶ蝶の姿をどう解釈したかということである。「鳥虫歌」所収の俗謡では、可愛らしくて美しいどころか、次々に相手を変えろ尻軽女をイメージしているような気配である。もちろん俗謡といっても、そこに歌われているイメージが広く行き渡っていた普遍的なものだったと言い切れるわけではない。

それでもなにがしかのレベルでの認知度はあったはずである。あるいは、現代語でも「夜の蝶」といった慣用表現もあるので、蝶すなわち可憐という図式を前提にするのは、出発点からして一面的すぎるといった指摘もあるだろう。だが、一方に「とまりや名がたつ浮名たつ」をおいて考えれば、唱歌「蝶々」が登場した時点でイメージの大転換が図られたのではないかとも思えるのである。唱歌が教育ツールとして広く使われた結果、そこでのイメージを絶対的に思いがちだが、中には後付けで作られたイメージ、作爲的な姿も混じっているという話である。

地球一周旅行記(その一)

「世界とは 人類とは何か」

若山哲郎

去年長らく勤めた会社を退職した。最近では年金受給延長のせいか退職年齢も65歳と延びている所が多い。働こうと思えば会社も雇ってくれるのである。しかし60歳を過ぎれば条件は同じではない。概ね給料は4割カット、仕事内容は

を続けていました。そもそも学問に理系や文系といった分類はないはずと書いています。計算が得意だから理系といふのは単純です。理系は理論、理性で文系は情緒、感情といった漠然とした区別も現在の専門化した学問分野には当てはまりません。文系とされる哲学や心理学などは理性を使って物事の本質を探し出す学問です。昔の哲学者はすべて自然科学者でもありました。

とアドバイスをしてくれる人が多くいました。でもいろんな議論ができるから逆に面白いのではと考え決定しました。実を言うとこの決定は退職の一年ほど前からしていました。何故かというところからしていました。何故かというところからしていました。何故かというところからしていました。

も話しをしましたでしたが以外にも止める人はいませんでした。逆に、いいね、といってくれる人が多かったです。じや、これらの人のためにも行つてこようかという気になりました。出航は去年の10月22日横浜港からでした。105日間、世界一周です。実はピースボートというのは年に3回ほど世界一周の航海に出ています。去年が30周年で今回が81回の航海です。地球の回り方は概ね2通りあり北半球中心と南半球中心です。一般的なのは北半球です。中東、ヨーロッパ、北アメリカの多くの文明国に行くからです。しかし、今回選んだのはあえて南半球まわり。アフリカ大陸、南米方面です。理由は北半球は比較的行きやすいですが、南半球はめったと行けないという理由です。最近では日本人に人気の世界遺産マチュピチュが飛行機で2週間あまりのツアー80万円というのがあります。その南米大陸の南端マゼラン海峡まで行くというのはめつたなことではないでしょう。また、アフリカ大陸の喜望峰やマダガスカル島、イースター島などには行く機会は普通の人間にはほばないでしょう。

閑職とまではいかないが権限も責任もないヒラの業務になる。昨日まで部下であった社員に仕事の指示をされる。勿論、相手も遠慮があるがプライドというものがある人にはつらい一面もある。そんな理由であと二年を残し退職したのではない。一番の理由は体力と健康である。さあ退職、これから自由に好きなことをするぞ、と思っても身体が丈夫でなければ何をすることもできない。元気なうち会社勤めではできなかったことをやろうと思ったのが止めるきっかけでした。

そんなこんなで大学に戻ることを夢見て退職をしたのですがその前に現実の世界を知ることが必要でないと考えました。学問というのやはり机上だけではだめで実地に知ること、自分の目で見、自分の耳で聞くことが大切であると思いました。そこでその手段を探していました。前から気になっていたがひとつありました。皆さんもよく街角で見かける「世界一周99万円」のポスターです。あれは何なのか、少し胡散臭いと思いました。調べてみるとピースボートという組織で設立者はあの鈴木宗男と刺し違えた 高槻のねえちゃん 辻本清美さんでした。彼女が早稲田の学生時代に設立したのが母体となって現在に至っているのがこの組織。それゆえ平和を世界にアピールするための団体らしいのです。ま、これで行くかと友人に話をする

「左だから洗脳される、やめてき」

断は実行されるのみです。会社や友人に

さて、やりたかったこととは何だったのか。それは大学生に戻ることでした。大学に戻って自由に学問をし、世界とは何か人間とは、人類とは何なのかを研究する。これが長年の夢でした。幸か不幸か私はある事情で理科系の大学を出て技術系の仕事をして終えました。しかし、自分では歴史や哲学が好きでずっと勉強

「左だから洗脳される、やめてき」

断は実行されるのみです。会社や友人に

モリシヤス、(アフリカ大陸) マダガ

スカル、南アフリカ、ナミビア、(大西洋)(南アメリカ)ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、(太平洋)イースター島、タヒチ島、パプアニューギニア 以上3大陸、15カ国、17港を訪れました。それはそれは稀な体験でした。帰国して間もないですがこれから皆様にこの105日間の生活と私たちが今まで知らなかった本当に世界はどうなっているのかをお話ししましょう。現代版ガリバー旅行記にも等しいくらい面白く知らないことばかりです。ぜひ、お楽しみに。

B級サラリーマン渡世譚 その⑩

挨拶回り

明石幸次郎

2年ぶりに本社に転勤で戻ってきた明石は、躊躇することなく、人事部に挨拶に行こうと、人事、管理、資材、経理、総務部などが入っている旧館に向かった。旧館に入ると新入社員から5年間を過ごした日々が懐かしく思い出された。先ず、人事部長のKさんに挨拶しようと、3階にある人事部まで、階段を一步一步踏みしめて昇った。広島出身の創業者が作ったこの会社の同郷のK部長は、創業者の創業の理念を

一番に理解して、会社の為、従業員の為に人事部長としての役割と責任を背負っていると自他共に思わせる雰囲気を持っていた。それだけに女子を含む全ての人事部に「人事部に所属している部員は従業員の中で選ばれた社員で、それだけに服装、行動、言葉使い、仕事ぶりなど、全ての面で、全従業員の模範と成らなければいけない」と常日頃から、厳しく教育し、要求をしていた。反面、何かと自分に話しかけてくる従業員は分け隔てなく話を良く聞く耳を持っていた。何よりも人と話をし、そこから色々な情報を収集し、人事政策に生かすのが人事部長の仕事と思っているような人であった。

古めかしい人事本部と書かれた、ドアを開くと、旧知の女子社員のKさんが、明石の顔を見るなり近づいて来て「あら今度、輸出部に変わったんやね。人事部のAさん、Hさん辺りが輸出部は英語が出来る社員とスマートな社員が選ばれるのに、明石君は何で選ばれたんや?工場で上司とケンカして放り出されたのと違うかと辞令が出る時に噂してたんよ」と耳打ちされた。「行き成りきついなあ。俺も何で知らんわ、工場で機嫌よく仕事してたんよ。それが急に転勤やと。上司の“仲代達矢さん”に聞いたら英検2級を持ってい

たから本社の人事部が決めたと言われたんやけど。上司とケンカなどしてません。俺なんかが選ばれたのは、この会社が国際化する為の人材がいらないということなんやで、人事部がしっかりと、そういった人材確保するか、養成しないとアカンやないか」と真顔で言い返すと「私にそれを言われてもー。ところで、誰に用事?」と聞かれたので、「K部長はおられるの?」

「今、会議中だけど、あと10分位したら終わるので、席に戻られたら呼んで上げるので、お友達のM君と話をしていたら。M君の席で喋っていたら駄目よ、部屋を取って上げるから、そこで話をしてね。M君を呼ぶから」「有難う。まあ、Mとの話は後にするわ。10分で終わらないわ。それより、Yさんは何処に居るの」「ああ、右を行けば奥の席に居られるよ、それじゃあ、後で」と親切に教えてくれた。Yさんのいる人事本部の第2部に入って行つた。Yさんは明石の顔を見るなり、大きな声で「明石、こっちや何しに來たんや」と手招きして呼んでくれた。その声に静かに黙々と仕事をしていた周りの人事部員はいっせいに誰が來たのかと言う顔で明石の顔を見た。Yさんの席に近づくと、「今度、輸出部に転勤になりましたので、挨拶に参りました」

と頭を下げると「おい、明石、お前の英語は大丈夫か?」と言われたので、周りの社員を意識して「まあ、Yさんに中学時代に英語の基礎を教えて貰ったので、大丈夫だと思えます。あとは、場数と勉強です」と答えると「お前、エエこと言やないか。勉強せえよ。毎晩、難波に近いからと言って、お前の同期と飲みに行つてばかりしていたら、アカンぞ。処で、上司から担当国を聞かされたか?」さすがに、K部長の秘蔵子のYさんは、聞くことが細かいと思つたが「アジアをやれ。特に韓国、中国、スリランカに力を入れるように言われました」「韓国か?韓国はMがやっていたのと違うか?あいつ俺に会つたら、しょっちゅう韓国のことで、こぼしていたなあ。Mがお前の指導員か?」「そうです。MさんからYさんに会つたら宜しくと言われていました」「あいつも、自分の意見を持つて熱心に仕事をやつてゐるみたいだが、不満が多いと聞いている。明石、お前も気をつけろよ。自分の意見を持たないと駄目だが、それに固執して上司とぶつかったら、会社は組織で動いているので上司の意見が勝つに決まつてゐるわ。そこを、ぶつからずに上手く上司と話し合い、自分の意見をも聞いてもらいながら、自分の仕事に反映させる、これをしないと仕事をしていても成果が上がらないし面白くない。

老人の戯言

駒田明克

は学生を中心とした若者の姿がありました。

○料理屋の品定め

小生、昔から陶器に興味を持っておりました。特に、食器にはことのほか目が向き、いつも出される料理とこの器はマッチしているか思っています。

以前、魯山人が『器は料理の着物である』といったそうですが、正にそのとおりだと思います。

最近のグルメブームでテレビでは毎日のように料理店や旅館の料理が放映されます。小生、テレビを見て味の方は分かりませんが、知らず知らずのうちに料理と器を見て、ここはダメだなと、料理店の品定めをしています。

それと、もう一つ小生なりの品定めのポイントとしては、床の間の花です。これは、一目でその店の品格が分かります。粗野な花器にさりげなく生けた一輪の季節の山野草。それだけで、その店の心が分かる気がします。

○今頃の若者は何故行動しないのか
今、日本は政治・経済とも非常に不安定な状況にあります。そこに、今回の震災。今後の日本はどうなるのか大変心配です。
戦後66年、日本人はよくがんばってきました。経済的繁栄とそれにより生じたヒズミの中、いつの時代にも時の政府と対峙し問題を提起し行動する中心に

ばしているから誰も文句は言わないが、何か問題がでたり、売上げが落ちたりすると、叩かれるぞ。お前が若い外大出の奴を教育してやれ。それが、お前の役割や。頑張れよ」と激励された。「分かりました、兎に角、面白そうな部門のようですので、頑張ります」と頭を下げた時、Kさんが、するすると近づいてきて「Y係長、失礼します。明石さんがK部長に度、会議室から自席に戻りましたので、明石さんと呼んで来てと言っておられます」と丁寧にYさんに話しかけた。「そうか、明石もK部長に挨拶に来るようになったか？成長したのう。」

処でKちゃん、部長は誰と会議していたの？」

「例のK工場の労災の件で、工場長、勤労課長、組合長が来られ、今後の対応を話し合われたようですが――」「そうか、あの工場は工場長と勤労課長、二人共、弛んでいるから、事故をおこすのや！現場の人間がかわいそうや、二人共、代えてしまわないと又、事故を起こすぞ、駄目やなあ」と、周りの社員も驚くような事を大きな声でKさんに向かってつぶやいた。何かシリアスな話になっています」

「失礼します」と言ってK部長席に向かって、ゆっくりとKさんの後を付いて行った。

評価をするのは自分ではないのや。お前の上司であり、周りの関係する人がするのや。本社資材ではM課長もSもHさんも優しいので、鍛えられ方が足らんかったが、S工場は一番厳しいところやから、思い切り鍛えられて少しはKマンらしくなったか？」「はい、2年足らずの短い工場勤務でしたが、自分でも本社にいた頃の何倍もの仕事はしました。したというより、せざるを得ませんでした。色々な評価はされましたが、S工場の業務部長で今は、U工場長のHさんには、本社から来た人間で一番、S工場に馴染んでいて周りの資材部員、現場の作業員、職長、作業長、取引先からも短期間で信頼を得ていたと褒めて貰いました。それが、今の自分の自信となっています。メーカーの社員としての大切な事を短い期間でしたが、身体で学んだと思います。本社にずーといたら、ちゃんぽらんのままで居たでしょうね。」それに対しYさんは、「明石、そこや、お前の工場で鍛えたメーカーマインドをこれから、輸出部で生かせるよ。今の輸出部は途中採用のA産業から来た社員と外大出で工場も国内営業も経験したこと無い、生え抜きの社員と工場から転勤してきた、個性派の部長で構成されている、まとまりの欠ける組織体や。皆んな、好き勝手にやっている組織と見られている。今は売上げを伸

真 無為 無形？

造化者 無私

自然 一？

無名 自生？



道、ってなんやねん？4

前号の原稿を書いているときから、俺は何という愚昧なことをしているんだと気づきはじめていた。福永光司さんの論考にそって、老荘の「道」というものの性格について、『老子』や『莊子』を引きながら書きすすめようと考えたが、そういう発想自体が愚かだったようだ。

村上重良は『世界宗教辞典』のなかで、「道は天地よりも先にあって、すべてのものを生み出す根源であり、天地間のあらゆるものに行きわたっている」とされる。道は、人間の知覚ではとらえることのできない不思議なものであり、ことさら何もしないが、あらゆる現象は道の結果として現れる。つまり道とは、あらゆる現象の背後にあって、この世界を支配している根本の原理であり、真の実在なのである」と、老荘思想の根本概念である「道」を解説しているが、コーちゃんの「道」ってなんやねん」という疑問は、そういう辞書的な解答を期待しているわけではあるまい。

辻まことは、こういう疑問にたいして、言葉で解答してくれるもののうち、もつとも賢明なものは詩であるという。そしてこう続ける。「言葉によって、ものそのものを把握しようとするとき、最も愚劣な方法が論理にたよる方法だということを、私は、とうから気付いていた。体系的哲学が示すように、言葉でデテエルを追いかければ追いつけるほど、本質は遠ざかる。魔力を失った言葉は、属性の死骸をつかむ。それらはいつも、海に泳ぐ鳥賊を説明しようとして、するめを提示するのに似ている」。そして「詩はずっとよく『生命』をとらえる」と。

「道」は言葉では説明できないものというのが前提だが、『老子』は比喩的な言葉や逆説的な言い方、また詩的表現で「道」を説明する。「道」は、象徴的言葉、否定的言葉、詩的言葉でしか説明がつかないのである。ということとは、俺がやろうとしたアプローチは「最も愚劣な方法」だということだ。では「道」をとらえるにはどうすればいいのか。詩人の手を借りるしかない。少し長くなるが、詩について前置きしておきたい。

以前寄稿した「詩」という小文のなかで、若手詩人杉本真維子の言葉を紹介した。「どんな人でも年をとるにつれ、経験への自信を糧に生きて

いこうとするなかで、詩は、逆に、その経験を、いったん全部脱ぎ捨てることを求める。そして、昨日生まれたばかりの赤子のような瞳で、世界を見るきつかけを喚起する。そういうものが簡単であるはずがないと、勇気をもって言ってしまう。でも、だからこそ、まだ一度も出会ったことのない、瑞々しい自由が、すぐれた一篇の詩のむこうには、必ず、待っている」。

詩が求める「経験をいったん全部脱ぎ捨てること」とは、『老子』においては、儒家の人倫の道を離れること、人間の価値観や社会規範を根底から否定することである。そして『老子』は、無為の徳（徳とせざる徳）——儒家の仁・儀・礼に優越する徳——を豊かにそなえた人を、嬰兒にたとえる。たとえば十章。「生命の車に乗りて、無為の道しつかと抱き、離れることしばしだになし。精気を外に洩らさず、心身のこよなき柔^{しなや}かさを保ち、その生い^う生い^うしさは^{みどりこ}嬰兒のごと」（福永光司・訳解）と、「道」を体得した人を赤子にたとえる。

詩人ではないが、生き方が詩そのものだった人がいる。ダダリスト辻潤と『青鞥』発行人伊藤野枝の長男、辻まことである。辻の詩論はたいへん示唆に富んでいる。

詩は「元来感性の次元で交信されるもの」であり、「悟性の次元に引きずりこんで、あれこれ考えようとする」のはトンマな「意識」の働きだという。「実意識され得る思想、感情を充足させる作品は程度の低いものだ。それは現実の場で充足し得る前提をもって

いるからだ」。つまり「意識」の働きではとどかない領域、現実の場を超えた領域がある。そういう領域を含んだ世界に人間は住んでいる。「識域下に抱いている願い、生命の底にある力の正体は『予感』し得るだけで、顔を見ることでできない」。名も無い、色も形も無い、だがたしかに実在する「道」もまた予感しうるだけかもしれない。だが「かなわぬ願いを追求するのが人間という罰せられた生物の運命だ」

聖書「ヨハネ伝」の冒頭に「はじめに言葉あり、言葉は神とともにあり、言葉は神なりき」とあるように、キリスト教の世界では、言葉は神の光であり、世界が創造される根源にある。『老子』においては、はじめにあるのは「道」であり、それは言葉も光も形も色もない無明の混沌である。（猿）続く

